

日本都市計画学会

学会賞・功績賞・国際交流賞
受賞一覧ならびに授賞理由書

2011 年年間優秀論文賞
受賞一覧ならびに授賞理由書

公益社団法人

日本都市計画学会

目 次

1. 学会賞

1) 受賞者一覧	1
2) 選考経過および各賞の対象内容	2
3) 授賞理由	
(1) 石川奨励賞	3
(2) 論文奨励賞	4

2. 功績賞・国際交流賞

1) 受賞者一覧	7
2) 選考経過および各賞の対象内容	8
3) 授賞理由	
(1) 功績賞	9
(2) 国際交流賞	11

3. 2011 年年間優秀論文賞

1) 受賞論文一覧	13
2) 選考経過および表彰対象	14
3) 授賞理由	15

日本都市計画学会 学会賞受賞者

(受賞者敬称略)

<石川奨励賞>

神戸の震災復興事業 -2段階都市計画とまちづくり提案-

財団法人神戸市開発管理事業団 中山 久憲

自動車と建築：モータリゼーション時代の環境デザイン

名古屋大学大学院 堀田 典裕

<論文奨励賞>

超高齢社会における持続可能な移動サービスの研究

練馬都市整備公社 阿部 名保子

1890年代から1930年代の古きパリ委員会による歴史的環境保全に関する研究

-歴史的記念物をめぐる都市的視点の導入と展開-

フランス国立科学研究センター 江口 久美

集約ポテンシャルの空間分布に基づく商業施設の出店と撤退の数理モデル

首都大学東京大学院 讃岐 亮

地域主体によるデザイン協議の成立要因についての研究－銀座を事例として

銀座街づくり会議事務局 竹沢 えり子

エコミュージアム概念に基づいた文化資源マネジメントに関する研究

北海道大学 村上 佳代

発展途上国における都市遺産観光開発に関する研究

北海道大学 八百板 季穂

日本都市計画学会

学会賞 選考経過

2012年（2011年度対象）学会賞は、会員が推薦した石川賞候補2件、石川奨励賞1件、論文賞候補1件、論文奨励賞候補10件、計画設計賞候補1件、計15件が審査の対象となった。

表彰委員会（学会賞選考分科会・委員全17名）は各々の候補の業績について複数の担当審査委員が独立に査読および調査を実施し、各委員から提出された評価にもとづき、分科会で慎重に検討の結果、受賞候補を選定した。

特に評価の分かれた案件については委員会席上でその結果を照合、討論、協議し、分科会の最終審査結果とした。さらに分科会の審査結果を理事会に諮って、石川奨励賞2件、論文奨励賞6件の受賞が決定した。

各賞の対象内容

石川奨励賞

都市計画に関する独創的または啓発的な業績により、今後の都市計画の進歩、発展に寄与しうる貢献をした個人または団体を対象とする。

論文奨励賞

都市計画に関する将来性・発展性が顕著な研究論文を最近（過去1年以内）発表した会員（個人）を対象とする。

石川奨励賞	
受賞者	中山 久憲
作品名	神戸の震災復興事業 -2 段階都市計画とまちづくり提案-
授賞理由	<p>本書は、神戸市職員として 16 年間に及び阪神・淡路大震災の復興事業に携わった著者が、神戸市での復興事業の過程を、現場での体験に即しながら、「2 段階都市計画」、まちづくり協議会、震災復興土地地区画整理事業、震災復興再開発事業の各点から整理した労作である。</p> <p>住民感情の変化を含めた住民参加及び行政との協働による復興事業の実態や、困難な状況の中でも将来を展望し決断していった行政の政策遂行の根拠などを、震災以前からの神戸市でのまちづくり背景もふまえてわかりやすくまとめた貴重な情報源であるとともに、非常時の策として採用された「2 段階都市計画」の地方分権社会における活用可能性の提案など示唆に富む内容である。</p> <p>東日本大震災の復旧・復興が本格化し、生活の基盤である町の再建が始まる中、まさに時宜を得た出版で、今後の震災復興等に関する都市計画の発展に寄与するものであり、石川奨励賞に値するものと評価する。</p>

石川奨励賞	
受賞者	堀田 典裕
作品名	自動車と建築:モータリゼーション時代の環境デザイン
授賞理由	<p>本著作は、選書形式の出版物であるが、豊富な文献資料を収集・整理・考察することにより、クルマ社会到来に伴う、わが国における建築・土木・造園・都市/地域計画等の環境デザインの急激な変容を包括的に論じた、独創的な業績である。</p> <p>これまで建築・土木・造園・都市/地域計画は、本来、互いに密接な関係にありながらも、独立した学問・職能分野として確立されてきたため、これらを相互に関連づけながら計画や設計の歴史を見通すことは必ずしも重視されて来なかった。</p> <p>これに対し、本著作は、「クルマ社会」対応の建築やサービス施設の類型毎に、プロトタイプが考案され変容していく過程や、そこに潜む諸提案の意図や思いについて示唆に富んだ考察を展開したことはもとより、これら四者の物理的関係を描くことにより、我が国における戦後の環境デザインの歴史を包括的に論ずる道を拓いた点が、特に高く評価できる。</p> <p>以上により、本著作は石川奨励賞にふさわしい業績と認められる。</p>

論文奨励賞	
受賞者	阿部 名保子
作品名	超高齢社会における持続可能な移動サービスの研究
授賞理由	<p>本論文は、我が国の公共交通に関する政策等をレビューする中で高齢者等の移動困難者への移動サービス供給に関する動向を把握した後、公共交通と私的交通の中間的交通モードである福祉有償運送に焦点を当て、①事業者の運営実態の分析、②自治体の助成政策と移動サービス供給との関連性分析、③大都市圏郊外地におけるアンケート調査に基づき移動ニーズの実態とその将来動向の分析を行い、超高齢社会における持続可能な移動サービスのあり方について提言を行ったものである。</p> <p>やや報告書的であり、分析内容面で物足りなさを感じると言えなくもないが、今後益々重要性の高まるテーマを扱った論文であり適時性を有しているとともに、独自の調査に基づき独自の視点から丁寧に分析を行っており、今後の地域公共政策に対して有用な結果を提示している。特に、実態把握結果の資料的価値は高いと言える。これらのことから、本論文は論文奨励賞に値すると判断する。</p>

論文奨励賞	
受賞者	江口 久美
作品名	1890年代から1930年代の古きパリ委員会による歴史的環境保全に関する研究 -歴史的記念物をめぐる都市的視点の導入と展開-
授賞理由	<p>この作品は、1890年代から1930年代までの「古きパリ委員会（CVP）」の活動に着目し、保全すべき記念物に関する考古学的・芸術的目録の作成を通じて、歴史的記念物保全に周辺環境との関係を捉える都市的視点を導入し、後の面的な保全制度に影響を与えていった過程を、CVPの議事録等の関連史料から明らかにしたものである。</p> <p>フランスにおいても詳細には検討されてこなかった CVP の議事録を丹念に調べたうえで、CVP による評価の視点を明らかにし、それがわが国の歴史的記念物保全制度へと反映されてきた過程を具体的に示すなど、研究論文として高く評価できるものである。</p> <p>また、パリの都市景観施策の源流に、市民に親しまれてきた日常の都市風景の価値を掘り起こす CVP の取り組みがあることを明らかにし、日本の歴史的環境保全のあり方と対比することによって、地域で親しまれる景観の保全・育成をめざす近年の景観施策に対しても有用な知見を提示していると言える。</p>

論文奨励賞	
受賞者	讃岐 亮
作品名	集約ポテンシャルの空間分布に基づく商業施設の出店と撤退の数理モデル
授賞理由	<p>本論文は、我が国の大規模商業施設の出店と撤退を客観的に説明するために人口分布と距離を変数とする単純な数理モデルを提示している。岩手県北上盆地、新潟県新潟平野においてショッピングセンターと家電量販店にモデルを適用してその妥当性を多角的に検証している。</p> <p>精緻な分析を通して、地方都市の中心市街地の衰退により広域的な要因が大きな影響を及ぼしている可能性が強く示唆されている。たとえ従来の中心市街地を全面的に再開発して巨大商業店舗を建設したとしても、既にその場所は空間的に最適立地点からかなり乖離しているという結果には迫力を感じる。さらに郊外型店舗が先手必敗の性質を帯びており、スクラップ化が必然という主張についても、高齢社会や自治体財政逼迫を鑑みると、興味深い知見である。</p> <p>以上より、本論文は論文奨励賞に十分に値するものと判断する。</p>

論文奨励賞	
受賞者	竹沢 えり子
作品名	地域主体によるデザイン協議の成立要因についての研究－銀座を事例として
授賞理由	<p>本論文は、1998年以降の銀座の地域としての街づくりへの取り組みを、特に銀座デザイン協議会によるデザイン協議の実態分析を通して実証的に明らかにした優れた論文である。①協議内容の分析、②事業者アンケートとヒアリングの分析がその核をなしている。本論文はこの①②に加え、前段としていかにこのデザイン協議会が成立したかを、後段としてそのような公共性が高く皆がまとまって「銀座らしさ」を協議する協議会を生み出した要因は何かについて、ていねいに分析しかつ記述することで、全体を有機的な論文へと仕上げている。公開されていない議事録等の分析による成果は、この論文の限界というより特長とみるべきだろう。そして、「地域主体によるデザイン協議の成立要因」を外的要因と内的要因の両面からしっかりまとめている。論は生き活きとしていており、これからのさらなる展開も期待させる。以上により、本論文は論文奨励賞に値すると判断する。</p>

論文奨励賞	
受賞者	村上 佳代
作品名	エコミュージアム概念に基づいた文化資源マネジメントに関する研究
授賞理由	<p>文化資源マネジメントにエコミュージアムの手法が有効であることを、日本国内とヨルダンハシミテ王国における事例研究を通して検証した論文である。文化遺産、文化資源等の概念整理から文化資源マネジメントを課題にあげ、エコミュージアムに着目する点は論ずるまでもなくその親和性は認められものであるが、多くの文献整理と現実のフィールドから得た知見とあわせて明瞭に論理づけている点は評価できよう。文化財保護をエコミュージアムのようにその場の環境も含めて文化遺産として提起するのは時流に乗った考え方であるが、エリア悉皆型抽出法、ストーリー志向型抽出法の二つを提起した点も成果とされる。優れた点は萩市のサテライト実現のプロセスに関わり、それをヨルダンハシミテ王国のサルト市に適用するという実践的な展開を行なった点にある。</p> <p>しかし、対象地の選定理由や位置づけ、論文の書き方に一般の科学的論文の形式ではない主観的表現や説明不足の不十分さも感じる。今後、その点は経験の中で克服していくことで、参与観察調査を展開してきたその行動力とユニークさをむしろ評価し、今後の活躍を期待したい。</p>

論文奨励賞	
受賞者	八百板 季穂
作品名	発展途上国における都市遺産観光開発に関する研究
授賞理由	<p>本論文は、国際的な議論や先行事例を整理した上で、現地調査とアンケートによる丹念な実態把握を行い、日本の都市史調査や住み方調査の手法を適用して分析・考察するという研究の枠組みがしっかりしている。内容に関しては、西洋主導の遺産概念が有形文化遺産中心であったことに由来する発展途上国における都市遺産観光開発の矛盾を鋭く指摘して、有形文化遺産と無形文化遺産の総合的価値把握を理論的・実証的に試みている点や、日本の伝建地区制度が発展途上国における都市遺産観光開発の課題解決に資するとする着眼点が新鮮である。そして、具体的な解決方を考察するに当たり、日本における文化遺産保存の取り組みを参考にしつつ、研究対象地における都市遺産観光開発に対する指針を提案している点は、ソフト技術の移転という観点から注目に値するとともに、今後の理論的・実践的発展性を期待させるものであり、論文奨励賞にふさわしいものと考えられる。</p>

日本都市計画学会 功績賞・国際交流賞受賞者

(受賞者敬称略)

<功績賞>

瀬口 哲夫 名古屋市立大学名誉教授
両角 光男 熊本大学理事・副学長

<国際交流賞>

大村 謙二郎 筑波大学名誉教授
林 建元 Professor, National Taiwan University
(Lin Chien-Yuan)

日本都市計画学会

功績賞・国際交流賞 選考経過

2012年日本都市計画学会功績賞・国際交流賞は、理事会のもとに設置された表彰委員会（特別功労表彰選考分科会）が、理事・監事・会長アドバイザー会議メンバー各位から候補者の推薦を受け、選考分科会で慎重に検討した。さらに分科会の審査結果を理事会に諮って、功績賞2名、国際交流賞2名の受賞が決定した。

なお、各賞の対象の種類は以下の通りである。

各賞の対象内容

功績賞

長年にわたって、都市計画学の進歩、発展に寄与してきた者で、その貢献が、社会的、学問的に見て顕著な者を対象とする。

国際交流賞

長年にわたって、都市計画の国際的交流に携わり、海外諸国との交流並びに啓発普及と人材育成に貢献した者（外国人・日本人）を対象とする。

功績賞

受賞者 瀬口 哲夫

授賞理由

瀬口哲夫氏は、名古屋大学・豊橋技術科学大学・名古屋市立大学において多年にわたり、近代建築史の研究に加えて、建築の歴史を活かしたまちづくりや土地利用計画を中心に都市計画分野の教育研究に従事された。この間、多数の研究論文・論説・著作を執筆されるとともに、都市計画とかかわりの深い行政組織委員を歴任されており、その功績は極めて大きい。

本会活動では、理事・学術委員・表彰委員会委員、中部支部副支部長・同支部長を歴任され、本会の発展に大きく貢献された。中部支部長時代には支部設立 15 周年記念出版として「幻の都市計画---残しておきたい構想案」を上梓された。

都市計画の実務面では、愛知県都市計画審議会特別委員、名古屋市都市計画審議会委員をはじめ、名古屋市都市景観審議会委員、半田市都市計画審議会委員、同都市景観審議会会長、各務原市都市景観審議会等々の委員を歴任された。

近年、「官庁建築家 愛知県営繕課の人々 (C&D 出版、2006 年)」や「同名名古屋市建築課の人々とその設計」(C&D 出版、2009 年)等、執筆活動も旺盛でおられるが、平成 23 年の名古屋市立大学大学院定年退職後も、研究活動を継続されるとともに、行政専門委員会委員等としてご活躍をされている。

以上のように、瀬口氏は、日本都市計画学会の活動ならびに都市計画分野の学術、教育、社会的活動の分野において、都市計画の発展に顕著な貢献があり、日本都市計画学会功績賞を授与するものである。

功績賞

受賞者 両角 光男

授賞理由

両角光男氏は、1971年に本会会員となり、本会九州支部副支部長・九州支部長及び本会理事を務める等、本会の運営に多大な貢献をなされた。

氏は、地元設立のシンクタンク（財）熊本開発研究センターの創設期研究委員として多数の地域調査や構想策定に参加し、大学研究室の機動力を活かした資料分析と地元目線の報告で高い評価を得た。また、1980年代にネットワーク解析手法を用いた施設配置計画研究に取り組み、学位論文「地域施設配置計画のためのネットワーク解析手法の開発と救急自動車配置計画への応用に関する研究」は、本会論文奨励賞を受賞した。同論文の提案がその後の熊本市における消防署や救急自動車配置検討の指針となった他、地域別病床数等を定めた熊本県保健医療計画や保健所統合再編計画策定にも同氏の知見が活かされた。

民間コンサルタントが成長した1980年代後半からは、自治体委員としての技術指導や、都市計画行政における学識者としての活動に比重を移した。2005年には、実践的都市計画教育の場を目指す中心市街地のサテライト研究室：「工学部まちなか工房」設立を主導し、そこを拠点に、地元商店街・企業、行政担当者等と連携した中心市街地活性化の多彩な活動の展開・定着に指導力を発揮した。その継続的かつ意欲的な活動は国内の大学・行政・まちづくり関係者からも注目されている。

以上の通り両角氏は、教育・研究者としての知見や技術を活かして地方の都市計画・地域計画に多大な貢献を重ねてきており、大学と地域との関係を考える上で常に先導的役割を果たしてきた。また本会九州支部の運営に際しても、九州内の各大学都市計画研究室や熊本県・市を始め多くの自治体に積極的に働きかけ、支部活動の活性化に貢献された。学会および社会に対する同氏の活動実績を鑑み、日本都市計画学会功績賞を授与するものである。

国際交流賞

受賞者 大村 謙二郎

授賞理由

大村謙二郎氏は、1971年に東京大学工学部都市工学科を卒業後、(財)計量計画研究所、ドイツ学術交流会 DAAD 給費留学生としてドイツ・カールスルーエ大学建築学部留学、東京大学工学部都市工学科助手、建設省建築研究所を経て、1994年に筑波大学教授に着任以来、現在に至るまで、都市計画研究に多大なる貢献をしてきた。とりわけ国際的な活動に数多く参画し、都市計画研究および教育に大きな影響を与えてきている。

本会における活動としては、1988年の東京市区改正から100年を記念した日本近代都市計画「国際シンポジウム」の開催に尽力し、その記念誌で貴重な資料集として評価の高い「近代都市計画の百年とその未来」(共著)の編集を担当した。2005年からは国際委員会委員長に就任し、日本・韓国・台湾による国際都市計画シンポジウムの立ち上げおよび運営に主導的に関わり、今日の本会の国際交流活動の礎を築いてきた。

実務に関わる業績としては、ドイツの都市計画事情に精通し、日本の地区計画や再開発地区計画等の制度創設時の基礎調査では、ドイツの関連制度の調査報告及び現地調査コーディネート等を担当した。その成果の一部は、『協議型まちづくり』(共著)にまとめられている。1980年代にはJICAを通じた研究協力事業で、インドネシアやタイでの共同調査・研修にも貢献している。

研究・教育活動としては、都市法に関する海外比較研究、需要縮小時代の都市計画に関する日独比較研究等の多くの業績があり、2009年の日独シンポジウムを主導するなど、日独の研究交流に大きく貢献している。また、日本人学生のドイツでのサマースクールへの派遣、ドイツ人学生の日本でのオータムスクールの受入による学生同士の国際交流の機会を提供するなど、ドイツとの研究・教育交流にも大きく貢献してきた。

以上のように、大村氏は、日本都市計画学会での国際交流活動および、都市計画分野での実務での国際交流、海外若手研究者育成などの国際的活動において、これまで多大なる貢献を果たしてきており、日本都市計画学会の国際交流賞受賞にふさわしい人材と判断され、ここに日本都市計画学会国際交流賞を授与するものである。

国際交流賞

受賞者 林 建元 (Lin Chien-Yuan)

授賞理由

林建元氏は、国立台湾大学の建築与城郷研究所において教授（都市計画）を長く務めている。同時に、台北市財政局長を経て、2008年から2011年までに同市副市長に就任し、国際花博などを成功に導いた。現在は、国立台湾大学の建築与城郷研究所教授に戻られている。

林氏は、国立政治大学で学士号（土地経済学）を得たのち、1978年に国立台湾大学で修士号（都市計画）を、1987年にワシントン大学（米国、ワシントン州）で博士号をそれぞれ取得した。林教授は、都市のインフラ計画と土地開発の分野における公共政策の分析に広く携わり数多くの業績をあげていることで知られている。特に、都市のインフラ計画と土地開発の分野において公共政策の分析に関する数々の著作を公表され、都市計画の啓発に活躍されている。

TIUP (Taiwan Institute of Urban Planning) の会長として台湾の都市計画分野を率いるとともに、日本、韓国をはじめとする東アジアにおける学術連携の中核の一翼を担われている。また、台北市の副市長時代には、東京都との交流にも尽力された。

以上のような氏の果たしてきた貢献に、日本都市計画学会国際交流賞を授与するものである。

日本都市計画学会 2011年 年間優秀論文賞受賞論文

(受賞者敬称略)

Space Syntax を用いた街路パターン分析による路地を活かした密集市街地整備手法に関する研究
- 大阪市密集住宅市街地「優先地区」を対象として -

高木 悠里・嘉名 光市・佐久間 康富

メキシコ・シティにおける地域の歴史を踏まえた公共空間の改善プログラムの検討
- ペドレガル・デ・サント・ドミンゴ地区住民の認識史から -

吉田 祐記・土肥 真人

1950年代の大阪府茨木市における「田園都市論」と「近隣住区論」に基づく都市計画の取組に関する研究 - 中沢一夫の活動と業績 -

大塚 康央

戦前における内務省地方計画構想の一終着点
- 地方計画法案・関東地方計画要綱案の策定過程に着目して -

阿部 正隆・西村 幸夫・窪田 亜矢

近代の杭州における湖浜地区計画に関する研究

傅 舒蘭・永瀬 節治

住工共存地域における工場連携を基盤とした地域ネットワークの重層性に関する研究
- 大田区大森南における住工共存地区に着目して -

大熊 瑞樹・野原 卓

海岸空間とその背後空間を一体的に捉えた新たな海岸まちづくりに向けて
- 米国ハワイ州の“海岸線セットバックルール”に着目して -

岡田 智秀・横内 憲久

消費者行動に着目したハフモデルの新しい導出方法

本間 健太郎・藤井 明

日本都市計画学会

2011年 年間優秀論文賞 選考経過

日本都市計画学会では、当該年に発表された発表会論文及び一般研究論文に限定して、優れた内容の論文を表彰するための枠組みとして、「年間優秀論文賞」を新たに設置した。これは、学術委員会が当該年の1月から12月に発表された発表会論文及び一般研究論文の中から優れた内容を有する論文を選考・推薦し、理事会に諮り決定し、表彰するものである。

2011年は、発表会論文152編・一般研究論文19編、計171編を対象とし、学術委員会内に年間優秀論文賞選考ワーキンググループを設置し、慎重に検討の結果、授賞候補を選定した。さらに候補選定結果を理事会に諮って、8編の授賞が決定した。

表彰対象

1. 表彰対象

論文

2. 表彰のための選考対象となる論文

表彰当該年の1月から12月に発表された発表会論文及び一般研究論文 全編

論文名	Space Syntax を用いた街路パターン分析による路地を活かした密集市街地整備手法に関する研究 - 大阪市密集住宅市街地「優先地区」を対象として -
著者	高木 悠里・嘉名 光市・佐久間 康富
授賞理由	本論文は、Space Syntax を用いて街路パターンから路地を活かした密集市街地の整備について定量的に評価している。評価できる点については、第一に、来るべき大地震に備え都市計画において大きな課題である密集住宅市街地の整備を取り上げているという社会的有用性の点があげられる。第二に路地の生活のにじみだしのよさを残しつつ、災害時の避難性向上を目指した整備を目的としており、その両方の観点から定量的な評価を行って、有用な示唆を得ている点があげられる。

論文名	メキシコ・シティにおける地域の歴史を踏まえた公共空間の改善プログラムの検討 - ペドレガル・デ・サント・ドミンゴ地区住民の認識史から -
著者	吉田 祐記・土肥 真人
授賞理由	本論文は、住民参加を通じた公共空間の整備・改善を目指した地区改良プログラムと同地区の様々な改善を目指した制度的支援の評価について検討している。新規性の高い点は、住民の認識史という視点を導入し、ハード・ソフト支援が住民らにどのように受容されてきたのかを明らかにすることを通して、地区改善を行う制度の評価を行うという研究手法が展開されていることである。また、資料収集が困難であると思われる支援制度や組織体制、住民の認識について、多種多様な資料やヒアリングを通して、スラム改善を対象とした地区制度に関する有益な情報を提供するものでもある。

論文名	1950年代の大阪府茨木市における「田園都市論」と「近隣住区論」に基づく都市計画の取組に関する研究 - 中沢一夫の活動と業績 -
著者	大塚 康央
授賞理由	本論文は、中沢一夫が1950年代に地方自治体の職員として、都市計画実務に精力的・積極的に取り組んでいた姿を浮き彫りにし、都市経営的側面から工場誘致を行うことの必要性を田園都市論と絡めながら説明している。さらに市の人口増加に対応した施設配置計画を、近隣住区論を応用したという明確かつ実現可能な都市計画の理論・目標像も深く掘り下げている。このような、学と術の相互的な発展関係を考察する上でも、この研究が明らかにしたこと、また今後明らかにし得ることは、大変興味深くまた意義がある。

論文名	戦前における内務省地方計画構想の一終着点 - 地方計画法案・関東地方計画要綱案の策定過程に着目して -
著者	阿部 正隆・西村 幸夫・窪田 亜矢
授賞理由	本論文は、地方計画法案の具体的な策定プロセスについてはじめて明らかにした論文として評価される。地方計画法案の具体化に向けて大都市圏では実際に策定に向けて動きだしており、そのなかでもっとも重要な位置を占める「関東地方計画要綱案」の策定プロセスについても詳細なレベルで明らかにしている。一方で、関東地方計画の図案をもとに戦後の首都圏整備計画との関係性についても言及しており、戦前～戦後の連続性についても示唆に富む内容になっている。本稿は、内務省の側の地方計画に関する研究としては、現時点の到達点を示す論文として高く評価される。

論文名	近代の杭州における湖浜地区計画に関する研究
著者	傅 舒蘭・永瀬 節治
授賞理由	本論文は、湖浜地区計画を伝統的な自然景勝地の空間的文脈において重ねられた近代中国の特色ある都市計画の事例と位置付け歴史的に解明したものである。歴史研究としての結論の新規性があり、中国の近代都市計画史研究において、計画意図を解明することに成功している。また、必要な一次資料の多くが散逸しているという困難な状況を、多様な史資料を駆使することで、見事に乗り越えており、空間変容のダイナミズムに溢れる知見を提示している。新規性と多様な史資料の駆使という点から、年間優秀論文賞にふさわしい知見を提供したものと評価される。

論文名	住工共存地域における工場連携を基盤とした地域ネットワークの重層性に関する研究 - 大田区大森南における住工共存地区に着目して -
著者	大熊 瑞樹・野原 卓
授賞理由	本論文は、中小工場の集積する大田区大森南地区を対象として、機械金属工業の加工工場間の連携や技術協力といった工場ネットワークの空間的分布を明らかにするとともに、工場併設型ミニ開発内での地域活動など、直接的な業務関係以外をきっかけとした工場ネットワークについても明らかにしている。工場経営者や従業員への丹念なヒアリングや現地踏査の積み重ねにより、中小工場相互の連携関係を詳細に明らかにし、貴重なデータを提供している点が高く評価できる。

論文名	海岸空間とその背後空間を一体的に捉えた新たな海岸まちづくりに向けて - 米国ハワイ州の“海岸線セットバックルール”に着目して -
著者	岡田 智秀・横内 憲久
授賞理由	本論文は、米国ハワイ州で取り組まれている海岸まちづくりの防災対策手法である海岸線セットバックルールの内容とその効果について報告したものである。評価できる点としては、第一に、この制度と効果を取り上げることで、日本の今後の海岸防災対策を考える上で非常に参考になることを考察できている点にある。第二に、防災とまちづくりの融合性をこの制度を読み解くことで一定の方向性を示しており、海岸防災に限らず都市計画を考える上で貴重なポイントを示唆している点である。

論文名	消費者行動に着目したハフモデルの新しい導出方法
著者	本間 健太郎・藤井 明
授賞理由	本論文は、消費者行動の合理的な仮定を置くことでハフモデルを導出できることを示した研究である。また、データから推定されるパラメータの値の意味を明確にするだけでなく得られた結論の意義を明確にしている。都市解析の分野では古典的モデルと言えるハフモデルであるが、従来モデルで便宜上用いていた「購買地の規模」という魅力指標を「財の多様性」という明確な消費者効用から選択確率の意味づけを行って新たな解釈を与えることが可能となることを示した点が評価される。